

# インホーテーション サーキュラーNo.9

1971年7月

## 内容

- I 第4回大会案内(参会者必見) ————— 1
- II 第5回 運営委員会報告 ————— 3
- III 和文誌の取扱いについての報告と提案 ————— 5
- IV DGDへの佐藤忠雄教授記念論文募集 ————— 7
- V “初期発生における細胞”の刊行について ————— 8
- VI 事務局からのお願い ————— 9

日本産生生物学会

京都市左京区北白川退分町(〒606)

京都大学理学部植物学教室内

特別の事情のない限り，8月25～26日の大会までに，サーキュラーは出しません。大会関係で参会者に必要な情報は，このサーキュラー169と，前号(168)にてしております。べつに，あらかじめ大会出席申し込みの方には，大会委員会から講演要旨などの印刷物がとどけられます。いままでの例では当日参加者が少なくありませんが，大会委員会にとっては，あらかじめ出席者数が判つていますと予定がたて安いかと思われます。御協力下さい。また“初期発生における細胞”予約申し込みについても御注意下さい。

事務局

## I 第4回大会案内

大会参加ならびに講演申込みは，それぞれ約90名と60名です。学会事務局からの申し出にしたいが，新規の講演申し込みは不可能ですが，大会参加御希望の方の受けをひきつづいて行ないます。インホーメーションサーキュラー168を御参考のうえ，早目にお申し込み下さい。

**イ.特別講演:** 次の3人の方々にお願いいたしました。多数の方の御来聴を期待しています。

(第1日(8月25日)午後の子定です)。

講演順 ①和田正三(東大・理・植)「光による細胞分裂の方向制御」

②波磨忠雄(名大・理・生)「色素細胞の分化とその展望」

③岡田善雄(阪大・微研)「somatic cellsの融合と雑種形成」

**ロ.会場変更:** さきに大会会場を九大理学部と御案内いたしましたが，会場の条件や交通の便などを考え，「ホテル・ステーションプラザ」(国鉄博多駅前，福岡朝日ビル内)に変更するよう準備をしています。懇親会も同じ場所で行ないます(「ホテル・ステーションプラザ」についてはインホーメーションサーキュラー168をごらんください)。

**ハ.シンポジウムなどのために会場を必要とする方はその日時，人数などをできるだけ早く準**

備委員会へお知らせください。これらの会場は九大理学部内に準備いたします。冷房設備のある会議室がそれほど多くありません。この点はあらかじめ御了承ください。

二. 第4回大会および関係日程：最終的な細部に関しては参会申し込みの方は大会委員会から郵送される印刷物でご覧いただきますが、当日参加の方々の便宜のため現在内定の日程をお知らせ致します。

日 付	時 間											
	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
8月24日												
8月25日												
8月26日												

#### ホ. 講演をなさる方々へ

第4回大会の講演の要旨は、大会委員会で1,600字相当の写真製版印刷物が出されますが、それとは別に発生物学誌に掲載される原稿を下記要領にしたがっておまとめの上、必ず講演当日に座長席へお渡し下さい。

いままでの大会の例ですと、この原稿がとどけられないので、編集者が再三本人に連絡しなければならなかったり、あるいは要項に正確にしたがっていない原稿の場合第1頁のかなりの部分または第2頁のほとんどが白紙のままになり、印刷費・製本費がかさむだけでなく不体裁な出来上りになる等のおきています。お手数でも、要項をよく御覧の上、原稿をおまとめ下さい。

#### 講演内容執筆要項

1. 400字詰横書き原稿用紙を用い、記述は表題・著者名・所属機関名（略記しないこと）・本文（必要なら次に文献）の順とし、脚注として著者名に大文字綴りと欧文表題を付けること。

2. 刷り上りは1頁もしくは2頁とすること。刷り上り1頁の場合は、本文（文献記入の場合はそれを含めて）部分が厳密に1,850字以上1,900字以内にまとめること。刷り上り2頁の場合は第2頁は2,100字～2,150字分挿入できる。
3. 図や写真の挿入がのぞましい。両横縮尺率は2/3または1/2が好ましいので、その点を考慮して原因を用意されたい。図・写真挿入の場合には、刷り上りの大きさに応じて、その分だけ（説明文があればそれを含めて）2項で述べた本文（および文献）の字数を削減されたい。（1/4頁大が560字分に相当）
4. 文中欧文人名は大文字で記入されたい。また生物の和名はカタカナで学名には必ず実線のアンダーラインをほどこすこと。
5. 文献記入の場合は、著者名・年号・掲載誌名・巻・頁（始まりと終りを15-30のよりに記すこと）の順に記述すること。
6. 図・写真を挿入される場合、その製版代を著者に負担して載くことがあるので諒承されたい（1/4大で数百円）。  
また、刷り上りが1頁を超えるときは、超過印刷代を著者に負担して載く。
7. 別紙は、実費著者負担で作成するが、50部単位とし、**希望部数**を原稿第1頁に必ず**記入**すること。

## Ⅱ 第5回運営委員会報告

会長、運営委員改選後の運営委員会は4月3日京都で開催された。出席者は団会長をはじめ、天野実、江上信雄、江口吾朗、大西英爾、岡田節人、川上泉、金谷晴夫、黒田行昭、梶山正雄、竹内郁夫、林雄次郎、古谷雅樹の12委員（五十音順）（飯野徹雄、山名清隆両委員欠席）および、石崎、加藤両幹事であった。主な討議内容は次の通りであった。

### 1) 事務局構成

- a 幹事長：大阪市大理学部・生物の柳島直彦氏にお願いすることになった。
- b 幹事：会計担当の石崎宏矩氏（京都大・理・動物）、庶務担当の加藤憲一氏（大阪教育大・生物）は一応一年間重任することにし、別に神阪盛一郎氏（大阪市立大・理・生物）に委嘱。

c 事務局所在地は、従来通り京都大学とし、少なくとも一年間に変更しない。

2) 委嘱役員 会長・運営委員改選に伴なり委嘱役員の変更は当面、会計監査だけで、和  
欧両誌の編集委員の任期は3年のため、欧文誌編集委員のうち1名欠員になっている分  
につき残期(一年)のみ補充することになった。

a) 会計監査は巖佐耕三氏(阪大・教養・生)および中村和成氏(神戸大・医・解)  
に委嘱

b) 欧文誌編集委員(補充)は大西英爾氏(名古屋大・理・生)に委嘱

3) 和文誌の取扱いについて

重要な変更が提案された。詳細は別記を参照されたい。

4) 欧文誌の件

欧文誌(Development, Growth, Differentiation 略記DGD)の前身であるEmbryologiaの創刊者・佐藤忠雄博士に対し、なんらかの形で謝意をあらわしたいという意向が出された。具体的な内容については別記を参照されたい。

5) 会計年度および役員任期について

DGDの各巻第1号を1~2月頃に出版できるようにしたい。それには会計年度の4月1日から始まるという現行の制度より、1月1日から新会計年度になるようにした方がよい。1月1日からの新予算をくむとすれば、役員改選期を秋(9月~10月)にし、新役員によって予算案が作成されることが望ましい。そのため、今期の会長・運営委員の任期を明年秋(9月or10月)で終了するようにしたらどうかという意見が強かった。このためにはDGDの出版回数の上での調整と、それにもなり予算措置等が必要である。

6) 大会の件

大会は多くの会員交流の場として大切にしなければならない。このためには魅力ある大会のあり方が何よりもそまれる。したがって、運営委員会としても、このことを充分検討する必要があることが確認された。そのため、林委員を中心として、在京の若干の方々(47年度大会は東京で行なわれる見込み)で討議して載き、その内容を、運営委員会に報告されることになった。

7) サーキュラーNo.7でお知らせした国際会議開催の件について

その後団会長の下で慎重に検討されたが、主として経済上・運営上の理由により1972年度の開催は見送らざるを得ないという結論に到達した。この事について御意

見を寄せられた方々にお礼を申し上げたい。

### Ⅲ 和文誌『発生生物学誌』の取扱いについて— 報告と提案

本学会刊行物の一つ「発生生物学誌」を今後どのように取扱ってゆくかについて、運営委員会（1968年度）の依頼により過去2年間、岡田節人、古谷雅樹、柳島直彦の三者により、また和文誌編集委員会（上記3名の他、朝倉昌、大西英爾、山名清隆）で、慎重に討議されてきた。それぞれの時点での結論とその理由について、総会であるいはサーキュラー（№3、№7、№8）で報告されてきた。

和文誌委員会の結論は、現在の「発生生物学誌」は廃刊した方がよいということであったが（サーキュラー№8）、和文誌問題は大きな問題であるから改選後の運営委員会としても和文誌委員会の提案を受け、さらに検討した。その結果、8日の総会で、下記Bのような提案を行なうことになった。和文誌の廃刊は、会員にとって大変関係の深いことでもあるので、討議内容を全会員にお知らせしたい。この討議内容に関して、会員各位の御意見が学会宛寄せられることを特にお願いしたい。

（7月中におとどけ下さい。宛先は大阪市住吉区杉本町 〒588 大阪市立大学理学部生物学教室 柳島直彦）

#### A 討 議 内 容

1. 学会誌としての機能の面：最も重要な原著論文発表機能は、欧文誌により多く依存している。

現行の和文誌は大会発表内容を掲載している。大会発表者以外でも短報的報告が可能になっているにもかかわらず、利用者は現在まで皆無であった。この事実は和文誌の原著報告誌としての機能が切実に求められているのではないことを示している。したがって、和文誌のあり方の一つとして原著報告よりむしろレビューを主体としたものが考えられる。しかし、発生生物学関係の諸問題は、本学会会員にとどまることなくより広い層からも関心をもたれていることを考慮する必要がある。和文誌とは別に本学会編として総説を主体とした「単行本」刊行の企画が意欲的に実行に移されているのは、そのような配慮も含めてのことである。

また、会員相互の連帯のためには、学会誌の形式でなく、サーキュラーの拡大充実に

よるのがより有効であると考えられる。

2. 会員権利の面：より多くの会員の自由な発表の場としての学会誌は、たしかにある役割を持っている。しかしこの役割は大会発表を中心とした自由な討論により充分にはたされ得るものと考えられる。「大会報告」の内容は、学会誌という形式によらず、別の「大会予報集」あるいは「大会報告集」のような形で記録することの方が、实际的であろう。大会参加が出来ない会員にも発表の場としてこのような刊行物の利用を可能にすれば、発表権および交流の意味を広く生かすことが出来る。

3. 学会の経済面から：現行の会費の使用区分は次の表の通りであるが、これは算定上の規準であって、実際は和文誌印刷代は赤字となっており、また事務費（サーキュラー印刷、郵送費、運営委員会費、事務補助人件費および事務通信連絡費等を含む）も不足となっている。

種 別	会 費	経 費 内 わけ		会 員 比 率 (総計約500名)
		会誌印刷費	事務費	
和文誌のみ	1,600円	900円	700円	ほぼ 1/4
欧文誌のみ	2,500円	1,800	700	ほぼ 1/4
和 欧 両 誌	3,400円	2,700	700	ほぼ 1/2

赤字の部分は、欧文誌の海外売り上げ等により、かろうじて収支のバランスがとれているのが現実である。したがって、和文誌を廃刊することは、経済面のみからみるときはプラス要因はあってもマイナス要因は見出されない。学会の費用が主として欧文誌に依存（国内会員からの会費は出張費の約25%で、他は海外売り上げおよびバックナンバー売り上げ）しているという状態は、和文誌発行の有無にかかわらず変わらないだろう。

## B 運営委員会からの提案

前述のような諸点を、個別的・総合的に討議した結果、運営委員会としては、総会で次のような提案を行ないたい。すなわち、第一に、本学会は、欧文誌（Development, Growth, Differentiation, DGD）、「大会報告集」あるいは「大会予報集」、サーキュラーおよび単行本を刊行する。第二に、全会員がDGDおよび「大会報告集」あるいは「大会予報集」の配布を受ける。第三に、会費は全会員一律に年額3,500円とし、従来のような配布物のちがいによる会費種別は設けない。

「この提案は従来の会の運営からみるとたしかに大きな変更である。ことに“和文誌のみ配布を受けてきた会員”からみれば、DGDの配布を受けるとはいつても、“高い会費”になった印象を受けられるであろう。運営委員会が、この事情を考慮しながらも、なお和文誌の廃刊という結論に致ったのは、前項Aで述べたように、大会時の会員相互の交流のためには、全会員に配布される「大会報告集」あるいは「大会予報集」の形がふさわしいと考えられるからである。また、これと関連して、Ⅱの報告(p 4)でふれたように、会員の相互交流、連絡向上のために、《大会の在り方》をどのようにしたらよいか、現在検討が進められている。

「もちろん、いっぽうにおいて、国際的な研究発表機関としてのDGDの充実・発展のためにより一層の力がそそがれるべきであろう。このようなDGDの全会員の配布が大会の場においても、より密度の高いみりをもたらし契機になることを期待したい。

「この提案は、今後の学会の在り方にとり重要な意味を持っている。運営委員会としては、この提案の真意について、全会員に考慮していただけるようお願いしたい。

#### Ⅳ DGDへの佐藤忠雄教授記念論文募集について

DGD編集主幹 相 山 正 雄

先般の学会運営委員会において、DGDの前身Embryologiaの主幹でありました佐藤忠雄教授が70才の古希を迎えられるに当たり、学会として記念と感謝の意を表わすため、DGDの一つの号に記念論文を集めて編集することが決定されました。佐藤教授は名古屋大学御退官後、東海女子短期大学で引続き研究と教育に当っておられます。

省みれば、日本発生物学会の創立に際して、当時の発生物学協会の指導者であり、Embryologiaの主幹であられた同教授の御協力が非常に大きな力となったことを忘れることができません。現在のDGDが学会の欧文誌として発行されておりますその根元は、昭和25年Embryologiaを創刊し、嘗々苦心と努力を続けて発生に関する本邦唯一の欧文誌を育成された同教授の20年間の功績であります。この意味で上記の決定が運営委員会で行われた次第であります。

つきましては、この決定に従い、DGD Vol 13, No. 4を次のようにして編集したいと存じます。

1. 表紙にはとくに記念号とは記さないで、号の最初の頁に同教授の写真と記事（会長執筆の予定）を入れる。
2. 佐藤教授の記念論文として登載するものは、その初頁の下欄外に小文字でその旨を記す。  
従来の各号と同様に普通に寄稿された論文も平常通り含ませる。従って増頁した厚い号となる。
3. 記念論文のレフェリー扱いなどは通常の規定に従う。
4. 記念論文は印刷費を著者または研究室にかなり負担していただく（1頁3,000円～4,000円程度）。
5. 原稿の切は 9月15日とする。

以上のような要項を進めたいと思いますので志ある方々の優れた御原稿を御寄せいただきたく存じます。

## V 『初期発生における細胞』の刊行について

本学会編の第2回目の単行本は次のような内容で近く岩波書店から発行されます。第4回大会時には、持参出来る見込みですので、御希望の方はお求め下さい。（下記注意のこと）

- 第1章 無脊椎動物の生殖巣成熟（竹内重夫）
- 第2章 ヒトデ卵の成熟と放卵（金谷晴夫）
- 第3章 精子運動のエネルギー的背景（柳沢富雄）
- 第4章 卵割の物理学（平本幸男）
- 第5章 初期卵割期における高分子合成の調節（真野嘉長）
- 第6章 ウニ胚の小割球誕生から造骨片細胞としての成熟まで（国勝磨）
- 第7章 単離小割球および第1次間充織の *in vitro* 培養（岡崎嘉代）
- 第8章 孵化酵素（石田寿老）

**購入希望の方へ：**同封振替用紙（振込み代金不要）を用いて1,100円（定価1,300円）を学会宛（京都31332）8月15日迄に申し込み下さい。（ただし、1人1冊に限る）8月25・26日の大会に参加される方には、会場でお渡ししますから、振替用紙連絡欄に大会出欠を記入して下さい。大会会場でお渡しする場合でもあらかじめ振替用紙で申し込み下さらなければ割引き値にはなりません。くれぐれも御留意下さい。大会欠席の方には8月中に郵送いたします。

## Ⅵ 事務局からのお願い

サーキュラー原稿をおよせ下さい：会員相互の交流のために、研究室紹介、研究上の話題、その他の原稿をおよせ下さい。当面400字～1,120字の範囲でお願いします。宛先は大阪市住吉区杉本町大阪市立大学理学部生物学教室 柳島直彦とし、サーキュラー原稿と明記して下さい。

会費納入お願い：1971年度の会費は、このサーキュラーで紹介された提案（p.6）とかゝわりなく、勿論従来通りです。

（和文誌のみ…1,600円、欧文誌のみ…2,500円、和欧両誌とも…3,400円）。できるだけ早く学会宛（振替番号：京都31332）におとどけ下さい。学会の経済状態はギリギリのところでもあり御協力お願い致します。同封振替用紙を用いられ、かつ「初期発生における細胞」の申し込みと一緒になさる場合は、通信欄に、その由明記下さい。